

でなければ宜しからず、日本製の砂糖は甘味薄くして上白の色なし、甚だ下品也と云、源内申けるは、左もあるべし、尤ながら砂糖の土地は砂場が上品なり、然るに南京の土地は砂場少し、まかれども砂糖におゐては至極上品なり、左すれば土地計にてもなし、養ひ方第一なり、土地の宜しき方を見立、砂糖を植付養ひ方を法の通りにいたさば、日本にても上品の砂糖出来すべきは必定なり、其許其志しあらば、備後國にて田地を求め、砂糖を植付給ふべし、我等製法すべし、上品の砂糖出来なば大なる利益なりと申ける、喜四郎富る人なれば、夫は安き事なり、幸ひ備後の國には我等遠縁のものあり、早速畑をもとむべしと、飛脚を以て申し遣しける、備後にては様子は知らねども、急ぎ能畑地を求て、喜四郎方へ知らせければ、喜四郎は源内へまかゝの物語りして、旅用意して源内と同道して備後の國へ赴き、砂糖を植付ける、源内は喜四郎へ砂糖の養ひ方を傳授して、所々一見して又大坂へ戻りける、これ全く喜四郎へ利徳を付て、金銀を自由に爲すべき階梯なり、砂糖の製法左に記す、

鳩の糞 蜜を交四五日置、日に干て細末にして、砂糖を植べき砂へ交て栽るなり、

甘草 砂糖の木二三寸も延たる時分、水にとき根に懸る事、毎日二三度、三十日計如此すればよし、

右のごとく製法して、能々小石を拾ひ出し、其上にて毎日夕方水少しづ、根へ懸る也、扱喜四郎は源内が砂糖の傳授を得て、程なく砂糖成就したり、其味實に蜜の如く、色は太白にして、渡り砂糖に少しも相違なし、略下

〔諸事留^六〕近來於諸國、砂糖之製作追々相増、大坂表其外國々々積送高多分之趣ニ相聞候、右ニ付而者、自然本田畑^江甘蔗を作り、米穀ニかへ、砂糖製作を專といたし候義者、不可然事ニ候、依之自今已後、猥ニ本田畑^江甘蔗を作候儀、可爲停止候、但荒地或者野山を開き、米穀不熟之地^江作候義